



アイスランド語における二重母音の音韻解釈－ 特に「長さ」の解釈に焦点を当てて－

メタデータ	言語: ja 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2024-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): Icelandic phonemics/phonology, short and long diphthongs, field researches, acoustic analyses, word stress, syllable structures 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属: 室蘭工業大学
URL	http://hdl.handle.net/10258/0002000167

アイスランド語における二重母音の音韻解釈

－ 特に「長さ」の解釈に焦点を当てて －

三村 竜之*¹

(原稿受付日 令和 5 年 7 月 9 日 論文受理日 令和 6 年 2 月 28 日)

Phonology of the Diphthongs in Modern Icelandic

－ Particular Focus on the Interpretation of their ‘Length’ －

Tatsuyuki MIMURA

(Received 9th July 2023, Accepted 28th February 2024)

Abstract

A large number of coursebooks in Icelandic and in its pronunciation have been published so far, and quite a few studies on Icelandic phonetics and phonology have also been made. In these books and articles, it is often mentioned that Icelandic has both long and short diphthongs. Although the quantity distinction in diphthongs seems now an established belief in Icelandic language teaching and linguistics, surprisingly few attempts have been made so far at exploring the phonemic nature of the length distinction in the Icelandic diphthongs. Besides, little attention has been paid to diphthongs in the phonology of Icelandic and the question about the phonemics nature of diphthongs still remains unsettled. To solve these issues, the author has conducted field researches and acoustic analyses of the Icelandic diphthongs, and based on the evidence obtained through those researches and analyses, the author draws a conclusion that the diphthongs in Icelandic are phonemically combinations of a vowel and consonants, not autonomous diphthongal phonemes, and that the quantity distinction in the diphthongs is not a phonemic but phonetically conditioned or context-dependent phenomenon.

Keywords: Icelandic phonemics/phonology, short and long diphthongs, field researches, acoustic analyses, word stress, syllable structures

1 本研究の背景と目的

アイスランド語は、音声学並びに音韻論的な研究の歴史は長く、かつその成果も非常に豊富である (例: Garnes 1973⁽¹⁾; Haugen 1940-41⁽²⁾; Höskuldur Thráinsson 1978⁽³⁾; Kristján Árnason 2005⁽⁴⁾; Malone

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

1952⁽⁵⁾; Magnús Pétursson 1974^{(6)*2}, 1976⁽⁷⁾)。母音や子音といった分節音の音素分析など既に解決済みで異論を挟む余地などないように感ずる向きもあるかもしれないが、先行研究の音素分析や解釈の中には、未だ疑問の残るものも少なくはない。その要因として筆者は、アイスランド語の研究者が母語話者に偏る傾向にあり、非母語話者、とりわけ印欧諸語を母語としない研究者の視点が欠けているためではないかと考えている。特に、アイスランド語のように、文字使用の歴史が長くかつ正書法が確立している言語に強い傾向であるが、文字（綴り字）と音韻の慎重かつ十分な分離がなされておらず、正書法を拠り所とした母語話者の直観や内省観察に基づく安易な音韻論が展開されてきた、あるいはきいているように筆者には感ずる（例えば、後述する Kristján Árnason (1983: 128)⁽⁸⁾など）。この傾向は、本小論考が主題とする二重母音の音素分析・音韻解釈にも該当する。

アイスランド語の二重母音には長短の区別があると屢々述べられることがある。試みに、アイスランド語の音声学並びに音韻論の研究書や論文（例: Indriði Gíslason・Höskuldur Þráinsson 1993⁽⁹⁾; Kristján Árnason 1983⁽⁸⁾, 2011⁽¹⁰⁾）、発音の指導書（例: Alli Páll Kristinsson 1988⁽¹¹⁾）や教科書、参照文法書（例: 入江 2017⁽¹²⁾; Stefán Einarsson 1945⁽¹³⁾）を一度紐解けば、二重母音の長短の区別に関する記述を目にしにくいことはない。

しかしながら、アイスランド語の学習や聞き取り調査等を通じてある程度アイスランド語の音声に触れた経験のある者であれば、二重母音における長短の差異の存在に疑念を抱いてしまうかもしれない。それほどまでに、二重母音における長短の差異の実態は先行研究では明らかとされてはおらず、単にその存在のみが殊更に取り上げられているに過ぎない。アイスランド語を母語とする研究者・教育者にしてみれば、二重母音における長短の差異は自身でその差異を認識可能な、特段説明するまでもない自明の事柄なのかもしれない。しかし、そのような姿勢は言語を記述する上では一切通用しない。研究者・調査者の母語の別に拘らず、ある現象を客観的な観察に基づき実態を過不足なく説明することは、言語記述の基本であり責務である。この意味で、長短の差異の本質はおろか、二重母音それ自体の音韻論的な性格や位置づけすらも明らかとしていない先行研究は、著しく不満の残るものと言える。

このような現状に鑑みて筆者は、母語話者を調査協力者（インフォーマント）として聞き取り調査並びにキャリア文を用いた読み上げ調査を実施し、また得られた資料の音響分析も行った。本論考ではこれらの調査結果を通じて、未だ十分には議論がし尽くされていない下記の問題点を考察する：

- (1) i) アイスランド語における二重母音の長短の差異は音韻論的に有意義な（語彙レベルで規定する必要がある）現象か、あるいは音環境から導くことの可能な具体音声レベルでの現象か。
- ii) アイスランド語における二重母音は自律した音素か否か；自律した音素でないとすれば（換言すれば、音素結合であるならば）、母音音素の連続かあるいは母音音素と子音音素の結合か；それぞれどのような音素の結合か。

さらに、本小論考では、上述の考察を通じて次の三つの結論を導くこととする：

- (2) i) 二重母音の長短の差異は、二重母音の現れる音環境（音節構造、強勢の有無、当該音節を含む語の長さ）から導くことが可能であり、従って具体音声レベルでの現象に過ぎない。
- ii) 従って、研究書や論文における音声表記や教科書、発音の指導書等で殊更に強調したり注意を喚起する必要はない。
- iii) アイスランド語の二重母音は自律した音素として設定する必要はなく、むしろ母音音素 /a/・/e/・/o/と子音音素 /j/・/v/が結合し実現したものと解釈すべきである。

2 アイスランド語の音声・音韻概観

2.1 音素目録

暫定的ではあるものの、現時点では次頁の(3)に示す母音音素を設定することができると筆者は考えている：

*2 文献一覧の箇所でも注記するが、アイスランド人のラストネームは厳密な意味での苗字ではないことが一般的であるため、少なくともそれに該当することが明らかな場合は、本文中でアイスランド人研究者の名前を引用する際はラストネームのみではなくフルネームで引用する。

(3) /a[a~ɑ], e[e~ɛ], i, ɪ, o[o~ɔ], u, ʊ[ʊ~y], ø[ø~œ]/^{*3}

なお、瑣末であるとの誇りを免れないかもしれないが、(3)に示した音素は「母音音素」であり短母音音素ではない点には留意されたい。後述する通り、具体音声のレベルでは母音には長短の差異が確認される(例: *hvít* 「白い(単数女性形/複数中性形・長母音)」 v. *hvitt* 「白い(単数中性形・短母音)」)ものの、音節構造から長短の差異を導くことが可能である。つまり、音素のレベルでは母音量を指定(specify)する必要はない。従って、(3)に示した母音音素は質でのみ区別されるのであり、量の点では短でも長でもないのである。本研究の主題である二重母音は第3節にて詳述するため、ここでは割愛する。

子音に関しては、こちらも同じく暫定的な解釈案ではあるが、(4)に示す音素を筆者は設定する(「?」を付したものは未だ完全には結論の出ていない箇所である)：

(4) /p^h, p[p~b̥], t^h, t[t~d̥], k^h, k[k~g̊; x~χ?];
 f, v[v~v̥], s, θ[θ~θ̥/ð?], ð[ð~ð̥/θ?], h;
 j[j~j̥/ç], r[r~r̥], ʀ, l[l~l̥], ʎ;
 m[m~m̥], m̥?, n[n~n̥], ɲ, ŋ[ŋ~ŋ̊], ŋ̊?/

2.2 アクセント

アイスランド語はいわゆるストレスアクセントの言語であり、語におけるアクセント(主強勢)の位置は(5)に示す単純な規則で導くことができる(三村 2021⁽¹⁴⁾: 80)：

(5) 品詞や音節数、語種、語構造(複合か否か、複合語であれば内部構造/枝分かれ構造)の別を問わず、左端の音節に主強勢を付与せよ。

上記の通りアクセントの位置を導く規則が一つであるという点から、そして語の長さに拘らずアクセントの位置が一箇所に固定されているという点から、アイスランド語のアクセントは「一型ストレスアクセント」と呼ぶことができよう。

具体例を筆者の資料から引用する(三村(2020⁽¹⁵⁾); 各例の綴りの太字の箇所は主強勢の所在を表す)：

(6) a. Parts of speech

- (i) *dagur* [dɑː.ɣuːr] ‘day’
- (ii) *hvítur* [kʰvʲiː.tuːr] ‘white’
- (iii) *brenna* [brɛn.na] ‘burn’

b. The number of syllables

- (i) *grænn* [græːn̥n̥] ‘green’
- (ii) *bolli* [bɔ́(t)t̥t̥i] ‘cup’
- (iii) *herbergi* [hɛr.ber.ɡi] ‘room’
- (iv) *pelíkani* [p^hé(:).li.k^(h)a(:).ni] ‘pelican’

c. Loan words

- (i) *pappir* [p^há^hp.pɪr] ‘paper’
- (ii) *súkkulaði* [sú^hk.ku.laː.ði] ‘chocolate’

d. Compoundings

- (i) *sjónvarpa* [sʲóʏn.vàr.pa] ‘to broadcast’
 (< *sjón* [sʲóʏn] ‘seen, vision’ + *varpa* [vàr.pa] ‘throw’)
- (ii) *piparmynta* [p^hí.par.mìŋ.ta] ‘peppermint’
 (< *pipar* [p^hí.par] ‘pepper’ + *mynta* [mìŋ.ta] ‘mint’)

*3 本稿で引用する筆者の資料の音声・音韻表記には、補助記号も含めて全て国際音声字母(IPA: International Phonetic Alphabet)を使用している。

2.3 音節構造

アイスランド語は、多くのストレスアクセント言語と同様に、ある音節が強勢を担いいうるか否かということとその音節の（特に韻律部 *rhyme* の）構造との間に厳格な制約を認めることができる。一音節の内容語、換言すれば、語境界が後続する主強勢を担う音節*⁴ は、具体音声のレベルでは次の構造は認められない: *(C)V, *(C)VC（カッコ付きの記号は任意であることを示す; V は短母音を示す）。

また、具体音声のレベルでは強勢を担う音節として観察可能なものは下記の通り（筆者の資料から具体例を引用する）:

(7) a. (C)VCC

例: *lest* [lést] 「隊列」, *flakk* [flá^hkk] 「放浪」（^hは前気音 *preaspiration* を表す）

* 屈折形や派生形も視野に入れると(C)VCCC も認めうる:

dönsk 「デンマーク（人/語）の（単数女性形・中性複数形）」

b. (C)V:, (C)V:C

例: *mý* [mí:] 「蚊（の一種）」, *flak* [flá:k] 「切り身」

なお、ここで度々、「具体音声のレベル」と述べているのは、音韻解釈の立場によっては後述するように母音量を音韻論的に有意義な特徴とは見做さず、従って、(7b)のような長母音を有する音節を音韻論的には認める必要がなくなる場合があるためである。

さて、筆者のこれまでの調査でも例外と思しき事例*⁵ が若干数、確認されてはいるものの、(7)に示したような母音量と音節末尾子音の数との間の共起制限は原則的には成立すると理解してよい。従って、強勢を担う音節における母音量と末尾子音の数との間には相補的な関係が成立し、さらにストレスアクセント言語に関して指摘されている一般特性の一つである「母音の長音化」（窪菌 2002⁽¹⁶⁾、三村 2023⁽¹⁷⁾）を踏まえると、アイスランド語では母音量の差異は音節構造から導くことが可能であり、従って、母音音素は量的な対立は示さない、と解釈することが可能である*⁶。

3 問題の所在: 従来の二重母音の捉え方と問題点

3.1 アイスランド語の二重母音にまつわる従来の見解: 長短の差異の存在

二重母音の長短の差異に関しては後ほど詳しく議論するため、便宜上、音質（音色）の差異にのみ着眼すれば、アイスランド語には(8)に示すような5つの二重母音を認めうる。筆者の資料から具体例を引用する:

*4 随分と迂言的な述べ方に感ずる向きもあるかもしれないが、正確を期するためにこのような書き方をした。というのも、少なくとも筆者のこれまでの聞き取り調査の範囲では、例えば多音節語においては、主強勢を担いながらも CVC 構造を有する音節を確認することができるからである（例: *hes.tur* 「馬」; ピリオドは音節境界を指す）。

*5 語の音節数や語種を不問に付せば、これまでの約十年間に渡る（といっても、年に数回、一週間程度の期間に過ぎないが）調査を通じて大体 1000 項目ほどの語（の音声資料）を採取してきた。その中で例外と呼ぶことのできる例は数例見つかっており、次の語はそのうちの一つである: *bragð* [brá:yð] 「味」（なお、*bragða* 「味がする」という動詞があり、それとの関連から例外を説明することができるかもしれない）。また、{p, t, k, s} + {v, j, r} という特定の子音連結に先行する場合のみ長母音が現れうることは、既に数々の先行研究等で報告・言及済みである（例: *akrar* [á:kraʀ] 「田畑(複数主格)」(Alli Páll Kristinsson 1988⁽¹¹⁾: 25)）。詳細は紙幅の都合上、割愛せざるを得ないが、アイスランド語における音素配列の制約上、上記の子音連結の場合は、音節境界を子音連結の内部ではなく直前に設定せざるを得ないことが起因していると考えられる。

*6 厳密には、母音の長音化が生ずる条件は強勢の有無のみではなく、当該音節が開音節であることも条件として必要である。従って、音素レベルで母音に量の対立を認めない立場をとる場合は、（具体音声のレベルではなく）音韻論のレベルで当該音節が開音節構造となる、予め理論的な処理を施しておく必要がある。例えば、音節末尾子音（*coda*）（の一部）を「韻律外 *extrametrical*」や「音節外 *extrasyllabic*」として扱い（無論、当該子音がそのような振る舞いをするを裏付ける現象が必要）、具体音声のレベルでは存在するが音韻論のレベルではないものとして扱う、というのも一つの理論的な処理の方法である（紙幅の都合上、詳細は稿を改めざるを得ないが、筆者自身はこのような「韻律外」ないし「音節外」の概念に依拠する立場をとる）。

(8)*7 アイスランド語の二重母音 (具体音声レベル)

- a. [eɪ]: *sveit* [suéit̪] 「郊外・集団」, *heimur* [héim̪ur̪] 「世界」
- b. [œy̯]: *tau* [t̪hœy̯] 「布地・生地」, *kaupa* [k̪hœy̯pa] 「買う」
- c. [aʊ̯/aʊ̯]: *smá* [smáʊ̯] 「小さな」, *skáka* [skáʊ̯ka] 「(チェスで) 王手をかける」
- d. [æj̯]: *ætt* [æj̯ht̪(t)] 「血族・家族」, *fræði* [fr̪æj̯ð̪i] 「研究」
- e. [óy̯]: *tónn* [t̪hóy̯tn̪] 「音」, *póki* [p̪hóy̯ki] 「袋・バッグ」

上に示した二重母音には全て長短の差異が存在する、という考えがアイスランド語の教育や研究では半ば常識と言っても過言ではなく、学術的な論究を目的としていない、いわゆる語学教材や参照文法書、発音の指導・概説書の殆どで同様の記述が見受けられる。例えば、独習者向けの語学書である入江 (2017: 13-14)⁽¹²⁾は次のように述べて学習者に注意を促している:

- (9) この発音解説では長い二重母音 [アウー] のように仮名表記しますが、後半の [ウ] が特に長いのではなく、二重母音全体が長くなることを表し、短母音の位置の二重母音は全体が短くなるということに注意してください。

ár [アウル] 年 (単数主格) árs [アウルス] 年 (単数属格) 【強調は原文ママ】

また、外国人学習者に向けて編まれた発音教材である Ari Páll Kristinsson (1988: 12)⁽¹¹⁾は次のように述べて学習者の注意を喚起している:

- (10) Note that the diphthongs (*ei, ey, au, ó, æ, á*) can, like other vowels, be either long or **short** 【強調は原文ママ; 後略】. Many foreign students have had 【原文ママ】 difficulties in pronouncing the short ones, so let us practice this a bit 【後略】.

紙幅の都合上、該当箇所の引用は割愛するが、上記の他にも二重母音における長短の差異の存在や解説、注意喚起の記述は、例えば参照文法書の古典として名高い Stefán Einarsson (1945: 409)⁽¹³⁾やノルウェー語母語話者に向けて編まれた教科書である Eskeland・Stefánsson (1963: 10-11)⁽¹⁸⁾、スウェーデン語母語話者向けに書かれた教科書である Fries (1976: 81-83)⁽¹⁹⁾、やや学術的な視点から発音と形態論について概説した Kress (1963: 12-13)⁽²⁰⁾、さらにはアイスランドの高等教育用に執筆された教科書である Ásdís Arnalds・Sólveig Einarsdóttir (2010: 105-107)⁽²¹⁾にも確認することができ、アイスランド語の二重母音における長短の差異の存在はいわばその世界の「常識」ないし「定説」として捉えられていると言っても過言ではない*8。

3.2 アイスランド語の二重母音の従来の解釈

アイスランド語教育や研究の領域において二重母音の長短の差異が一種の「常識」であることを前節で確認したが、奇妙なことに、二重母音における長短の差異を音韻論的にどう位置付けるを十分に論じた研究は著しく少なく、長短の差異が音韻論的に有意義な特性であるのか、換言すれば語彙レベルで指定する必要のある特性であるのか否か、明確な結論を述べた研究は皆無に等しい。それどころか、二重母音それ自体を自律した音素として設定するのか、あるいは母音音素や子音音素の結合と解釈するのかについてすら決定的な議論がなされているとは言えない。

*7 純粋に音声のみに着目すれば、(3)に挙げた五つの他に、[ɔɪ] (例: *logi* 「意味」; 文字入力の都合上、ここでは「非音節主音 non-syllabic」の記号は省略する)と[yɪ] (例: *flugjó* 「意味」)も加えるべきではある。しかし、この二つは厳密には形態音韻論的に導かれるもの(換言すれば、名詞の曲用形や動詞の活用形のみ観察されるもの)であり、従って純粋に音韻論的な議論を試みる本論考では扱わない。

*8 ちなみに、実用的な会話や言語運用を主眼とするいわゆる語学教材には、二重母音の長短に関する言及は見当たらないようである。管見に及ぶ限りにおいては、Hildur Jónsdóttir (2004)⁽²²⁾、Helga Hilmisdóttir・Kozłowski (2009)⁽²³⁾、Neijmann (2001)⁽²⁴⁾がこれに該当する。また、アイスランド語の母音と子音の発音を詳説した古典である Sveinbjörn Sveinbjörnsson (1933)⁽²⁵⁾には、二重母音の長短に関する注意喚起に類する記述はないものの、二重母音の第一要素(例えば[eɪ]の[e])の長短を表記し分けており(例: p.17)、二重母音における長短の差異を認めていると推察することができる。

筆者の知りうる限りにおいては、Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)と Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾のみが(単なる発音・音声の記述ではなく)音韻論的な立場から二重母音について言及している。ここでは二重母音に関する従来の見解・解釈について批判的な視点から検討する。

まずは Kristján Árnason の三つの論究から見ていく。下記の(11)は Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾: 128)に提示されている表である(便宜上、音声表記は原文のものをそのまま引用せず、国際音声字母(IPA)に倣い一部変更してある; 表中の Fónem は音素を、Afbriðði は変異形(いわゆる音声実現形)を、Dæmi は具体例を表す):

(11) Fónem	Afbriðði	Dæmi
【中略】		
/ei/	[ei:] [ei] ([e])	<i>sein</i> [seim] <i>seinn</i> [seidn̥] ([sedn̥])
/au/	[œy:] [æy] ([ø])	<i>laus</i> [lœy:s] <i>laust</i> [lœyst] ([løst])
/á/	[au:] [au]	<i>Ása</i> [au:sa] <i>Ásta</i> [austa]
/æ/	[ai:] [ai]	<i>æsa</i> [ai:sa] <i>æsti</i> [aisti]
/ó/	[ou:] [ou]	<i>góla</i> [g̊ou:la] <i>gólfi</i> [g̊oulf]

この表から、少なくとも Kristján Árnason がアイスランド語の二重母音に関して次の三点を想定していることが読み取れる:

- (12) a. アイスランド語の二重母音はそれ自体が自律した(独立の)音素である。
 b. アイスランド語の二重母音に長短の差異はあるが、具体音声のレベルの現象である。
 c. 二重母音の長短の差異は音節構造(音節末音 coda の数)の差異と相関する。

特筆すべきは、(12)に示した三点が Kristján Árnason 自身の言葉では明言されておらず、従って読者の側にその解釈が委ねられており、また(12)の三点のそれぞれについて明確な論証もなされていない、という点である。(12a)の音素解釈に関しては、確かに二重母音それ自体を独立した音素として設定するという解釈自体は理論上は全く問題ないものの、その一方で母音音素や子音音素の結合という解釈の余地も残されており、したがって二重母音音素を設定する立場を積極的に取るならばその他の解釈よりも優れているということを明確に論ずる必要があるが、全くなされはていない。また、(12c)に関しても、音節末尾の子音の数から二重母音の長短が予測可能であり、末尾子音が一つの場合(例: *sein*)は二重母音は長く、二つの場合は短い(例: *seinn*)、ということが具体例から推察可能であるものの、言明はなされていない。さらに、現実的には音節末音のない音節にも二重母音は現れうるが、その場合の二重母音の長短についても含めた上での議論が求められるにも拘らず、全く言及はなされていない。

さて、残りの二つの論究である Kristján Árnason (1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)に関しても本質的な主張や解釈の方向性は変わらず、むしろ議論に費やされる言葉は Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾)よりも少なく、下記に引用する僅かな文言からその主張を読み取らざるを得ない:

- (13) a. Kristján Árnason (1998⁽²⁶⁾: 6)

“In addition to this 【筆者注: the vowel system】, there are five diphthongal *phonemes* 【イタリック体は筆者】, all of them falling: /ai/, /ei/, /œi/, /au/, /ou/ ”

- b. (Kristján Árnason 2011⁽¹⁰⁾: 52, 58ff.)

/i/-diphthongs	/u/-diphthongs
/ei/ /ai/ /øi/	/au/ /ou/

最後にもう一点、些末な問題点に過ぎないとの誹りは免れないかもしれないが、(11)の表の左端に示された音素表記については批判が必要である。敢えて言を俟つまでもなく、(11)の音素表記は紛れもなくアイスランド語の文字そのものである。確かにアルファベット(音標文字)の原則に立てば、一つの音素に対して一つの文字が対応するのは当然のことで、その意味では二重母音を表記するある文字(ないし文字列)に対してある音素表記を与えることは至極合理的な方法ではある。しかしながら(11)のような表記法をとってしまうと、アイスランド語の知識のないものにとっては、ある文字で表される音素が具

体的にどのような音価であるかを読み取ることはほぼ不可能に近い。Kristján Árnason (1983)⁽⁸⁾がなぜこのような表記法を採用したかの詳細は不明であるが、穿った見方をすれば、二重母音を表す文字（文字列）に対して音素としての位置付けを短絡的に与えたに過ぎず、音素分析や音韻解釈と呼ぶには程遠い。正書法の整った言語だからこそ起こり得る、母語話者の研究者の傲りと言ってもよからう。

さて、もう一方の先行研究である Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾も Kristján Árnason と同様に、/ei, ai, öi, au, ou/の五つの二重母音を設定している（「五つ」とは明言しておらず、p.40-41 の具体例や p.40 の説明から窺い知るに過ぎない）が、Kristján Árnason よりも精緻な議論がなされている。Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾: 44-45)は、アイスランド語の二重母音がそれ自体で自律した音素であり、母音音素と母音音素の結合、あるいは母音音素と子音音素の結合ではないという立場を明確にとり、四つの論拠を示している。本来ならば原典で述べられている順に触れていくべきであるが、費やしている単語の数から推察して2つ目の論拠が最も重要であると筆者は考え、最後に触れることとする。

まず第一の論拠から。baða と báða【筆者補足：イタリック体の箇所は前者が長母音、後者が二重母音】のような例から明らかな通り、二重母音それ自体が全体で長母音と交換可能であるため、二重母音はそれ自体が独立した音素である。

続いて二つ目の論拠（原点では三つ目の論拠）に移る。二重母音はそれ自体で音節を形成し、仮に二重母音を母音音素の結合と解釈すれば必ずと音節が二つ形成されることになり言語事実にそぐわない。

三番目の論拠、原典では最後に述べられている論拠として、二重母音は概して単母音(einhljóðin)【筆者注：長母音か短母音かの区別は不明】よりも僅かに長いものの、その差異は認識できるほどのものではない点を挙げる。

最後の論拠、原典では二番目に述べられている論拠として、例えば heid の二重母音 ei を/ej/と解釈すると held【筆者補足：母音は短母音】と最小対を為すことになり、二重母音を短母音音素+子音音素の結合と捉えることになるが、これはアイスランド語の事実にそぐわない点を挙げる。そもそも、heid のような音節末に子音の一つ現れる環境【筆者補足：_C#】における二重母音は held のような音節末に子音が二つ現れる環境【_CC#】に現れる二重母音に比べて長く、それにも拘らず heid の二重母音を短母音+子音と解釈すると、長い二重母音の存在を説明することができなくなる。また、仮に長い二重母音の存在を説明しようと試みるならば、短母音音素に長さの点で二種類（普通の短母音と heid におけるような極端に短い短母音）を設定せざるを得ない。さらに、例えば heid の二重母音を/ej/と解するならば/j/と子音音素の様々な結合を想定せざるを得ないが、このような想定は不自然であり、またアイスランド語において同時に子音であり母音でもある音を仮定せざるを得ないという。最後に、短い二重母音は時として短母音に近い発音になりうる点に触れ、それが二重母音の第一要素にほぼ相当する音価であり、従って、二重母音の後部要素が前部要素に同化して全体として短母音的な発音になるという事実は、二重母音の後部要素が子音的ではなく母音的であることの証明であると述べる。

3.3 従来の二重母音の解釈・扱いにおける問題点

Kristján Árnason (1983)⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾の主張に比して、Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾の主張は確かに精緻な議論に基づいてなされてはいる。しかしながら、個々の論拠を詳しく検討していくとその議論が不十分でありまた不明確な点が残されていることに気づく。

まず一つ目の論拠について。二重母音が全体で長母音と交換可能である、つまりは最小対をなす事例が存在するために、二重母音はそれ自体を音素として見なすべきである、という主張自体は筆者も異論はない。但し、この主張には次の二つの点で不十分かつ不完全であると筆者は考える。第一に、二重母音と長母音の対立例を通じて二重母音が自律した音素であることを証明するためには、長母音もそれ自体で独立した音素として設定する立場をとることが前提となるが、少なくとも Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾はその立場をとっていない。この点で、長母音との対立から二重母音音素を設定する議論はそもそも成立しない。第二に、仮に長母音との対立から二重母音を自律した音素として設定したとしても、二重母音音素をさらに細かく音素分析することが理論上許容されない訳ではない。例えば、ある言語において最小対の存在から音素/n/を設定したとしよう。しかしながら、当該言語において既に音素/n/と/g/を設定

することが可能であるならば、音素の数を可能な限り少なく抑えたいという経済性(ecology)の原理に立てば、/ŋ/を/n/と/g/の結合としてさらに分析することも不可能なことではない。重要な点は音素分析には様々な立場があり、可能性として残されている他の解釈を排除していないという点で、一つ目の論拠は不完全であり且つ説得力に欠ける。

続いて二つ目の論拠に関してであるが、筆者もその主張には賛成であり、二重母音を母音音素の結合とする解釈はとるべきではないと考える。但し、Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾の主張と決定的に異なる点がある。それは、母音音素の連続という解釈の可能性は受け入れながらも、その解釈の説得力や説明する上での経済性(ecology)の点からより優れた解釈を採用したい、という立場・姿勢である。二重母音を母音音素の結合と捉えること自体は理論上、不可能では全くない。例えば「二つ目の母音音素の成節性(syllabicity)を削除せよ」といった音韻規則を別途設定し適用する段階(古典的な生成音韻論に倣えば「派生 derivation」)を想定することになるが、十分に説明は可能である。しかし、少なくとも筆者は、音声と音素の間の関係は一対一対応すべきであり、形態音韻論のような複数段階の規則の適用によって導き出されるものではないと考えており、このような理論的な前提に立てば、規則の適用という無駄が生ずる解釈は自ずと回避することになる。Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾は自身の解釈を強く前面に押し出しはしながらも、残された可能性の一つである母音音素の連続という解釈がいかに理論的に優れていないかを積極的に論じてはおらず、この点において説得力に欠ける。

三つ目の論拠であるが、これは論拠として成立しているのか否か、換言すれば批判的考察に値する議論であるかどうか、筆者には判断できない。そもそも二重母音と比較している単母音(einhjóðin)が具体的に何であるかが明確にされておらず、Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾の主張を理解することができない。また、仮に氏の主張通り、二重母音が僅かに長くしかしながらその長さの差異が認識できない程度のものであったとして、なぜ二重母音それ自体を自律した音素として設定することの論拠となるのか、筆者には全く理解できない。

最後に四つ目の論拠に移る。四つ目の論拠も不明確な箇所が多く議論を正確に追うことが困難なため、正当に反論することは難しい。しかし一つ明らかな点は、Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾も Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)と同様(というよりは、アイスランド語学の半ば「常識」として)、二重母音における長短の差異の存在と、その背景にある音節構造と母音量の相関関係を議論の前提としているということである。後ほど詳述するが、二重母音における長短の差異の存在に関しては、特に長母音と並行的に扱うべき現象か否かという視点に立てば、疑念を挟む余地がある。仮に二重母音の長さの差異が地長母音と短母音の間におけるそれとは異質なものであるとすれば、四つ目の論拠の議論は成立しなくなる。さらに、四つ目の論拠を裏付ける最後の主張として述べられている二重母音の短母音化についても、その説得力は弱い。これも後ほど述べるが、確かにある音環境下において二重母音が(聴覚に基づく主観音声学的な観察でも把握できるほど)著しく短い発音となる場合があるが、なぜこの事実を以ってして二重母音を自律した音素として解釈することになるのか理解できない。仮に二重母音の後部要素を、/j/のように継続性のある有声子音(伝統的な音声学の用語でいう無摩擦継続音 frictionless continuants や鳴音 sonorants)と解釈しても、二重母音の短母音化、つまりは後部要素の前部要素への同化は十分に説明可能である上、仮に二重母音を母音音素の連続と解釈すれば、後部要素の同化現象はなおのこと合理的に説明がつく。以上から、二重母音の短母音化という現象では二重母音を音素として設定するという解釈を積極的に裏付けることはできず、母音音素と子音音素の結合という解釈も排除することができないのである。

以上、Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾の主張を中心に提起して二重母音を独立した音素として解釈する立場を批判的な視点から検証してきた。最後に、Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)と Magnús Pétursson (1978)⁽²⁷⁾のいずれにも(そしてその他のおそらくほぼ全ての先行研究に)通ずる問題点として、二重母音の長さの扱いについて批判的な立場から私見を述べることにする。Kristján Árnason が二重母音に長さの差異の存在を認め、且つそれが二重母音を含む音節の末尾子音の数と相関していること想定していることは、(11)に示した Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾: 128)の表から読み取ることができた。同様に Magnús Pétursson も二重母音に長短の区別を認めていることは、例えば Magnús Pétursson(1978⁽²⁷⁾: 40-41)に挙げた

用例の音声表記や、Magnús Pétursson(1978⁽²⁷⁾: 46)の次の記述からも明らかである：“Öll íslensk sérhljóð... geta verið löng eða stutt.”「アイスランドの母音は全て【中略】長短のいずれもあり得る。」。

さて、ここで重要な点は、Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)と Magnús Pétursson (1978⁽²⁷⁾)のいずれも明言していないことであるが、二重母音の長短の区別と長母音と短母音の区別を同列に扱っているのではないかと言うことである。既に筆者も 2.1 節や 2.3 節にて指摘した通り、またアイスランド語音声・音韻研究のみならず北ゲルマン諸語の史的音韻論の領域では紛れもない常識であるが、母音の長短（ここでは単母音のみを対象とする）と当該音節の末尾子音(coda)の構造との間には相補的な関係が成立する。既に 2.3 節にて触れた通り、若干の例外はあるものの、強勢を担う音節では下記に示すような（音素としてではなく具体音声のレベルでの）母音量と音節構造との間の相補的な関係が成立する：

(14) a. 短母音: (C)VCC (例: hvitt 「白い (単数中性形)」)

b. 長母音: (C)V:(C) (例: hvit 「白い (単数女性形・複数中性形)」)

注意すべきは、Kristján Árnason (1983⁽⁸⁾, 1998⁽²⁶⁾, 2011⁽¹⁰⁾)や Magnús Pétursson (1978⁽²⁷⁾)を含む先行研究は、(14)に示した相補的な関係と並行的に二重母音の長短の差異を捉えているのではないかと言う点である。簡略的に表すと(15)の通り（便宜上、二重母音を VV で表す）：

(15) a. 短い二重母音: (C)VVCC (例: rautt 「赤い (単数中性形)」)

b. 長い二重母音: (C)VV:(C) (例: rauð 「赤い (単数女性形・複数中性形)」)

第 4 節にて後述する通り、筆者自身も二重母音の持続時間に長短の差異が存在すること自体には異論はない。しかし、これを長母音と短母音の間におけるそれと同列に扱うことは極めて危険ではないかと筆者は考える。と言うのも、単母音における長短の差異（いわゆる長母音と短母音の音量・持続時間の差異）と二重母音のそれは異質であることが筆者の経験から明らかである。筆者がフィールドワーク（聞き取り調査）の最中に度々経験したことであるが、(14)に示したような hvitt と hvit との差異は母語話者であるインフォーマントには顕著な差異であるようで、こちらが母音の長短を誤って発音してしまうとすぐに訂正されてしまうが、(15)に示した rautt と rauð のような語の場合はそうではない。敢えて rautt と rauð の二重母音の箇所をほぼ同じ長さで発音してもインフォーマントには特段の反応はなく、殊更に違和感や誤りを指摘されることもない。

確かに(14)と(15)で見たように、短母音と長母音の母音量の差異と二重母音の持続時間の差異は同一の音節構造が関与していると言う点では確かに類似した現象と言えるが、母語話者の捉え方の点では著しく異なる異質な現象である。先行研究のみならず、言語教育の観点から二重母音の長短の差異に言及してきたこれまでの著作物は、全てこの点を考慮していない。言うなれば、アイスランド語研究・教育に携わるほぼ全ての人間が母語話者であるがこの事実は見落とされ、不問に付されてしまったのである。改めて、非母語話者の視点を通じて、この問題を改めて扱い直す必要があると筆者は考える。

4 二重母音のより理性的な把握と解釈に向けて

4.1 調査の概要

前節にて検討した先行研究に残る二重母音の扱いや解釈にまつわる諸問題を解決するためには、まずはアイスランド語における二重母音の実態、つまりは具体音声レベルでの動態の有無やその本質を明らかにする必要があると考える。そこで筆者は、二重母音の持続時間の実態を解明すべく、これまでの聞き取り調査で採取した二重母音を含む語を用いてキャリア文を作成し、母語話者の協力を得て読み上げ調査を行った。また、その結果を数値化し分析も行った。本節ではこの読み上げ調査の概要を示す*9。

キャリア文の読み上げ調査は、2019年9月14日並びに2023年3月18日に実施した。それまでの調査で既に二重母音を含む語は多数採取してはおり、その音声資料を用いて分析することも可能ではあ

*9 インフォーマントはこれまでのアイスランド語調査と同様、Auður Guðmundsdóttir 氏（女性）が務めて下さった。氏は 1955 年に首都 Reykjavík 市に生まれ、9 歳から成人頃まで隣町の Kópavogur に居住（Reykjavík から徒歩で一時間から一時間半程度の距離）。日本の小・中学校に相当する教育機関（grunnskóli）にてアイスランド語とデンマーク語の教鞭を執るためデンマーク語の運用能力も高く、その他にも筆者の把握する限りでは英語の運用能力もある。なお、これまでの調査も含めて全て、媒介言語としてデンマーク語を使用している。

るものの、各二重母音の現れる環境を揃えないことには持続時間の正確な分析は行えないため、キャリア文に入れて発音してもらおうという手法をとった。また、二重母音を含む語自体を単独で発音してもらおうことも可能性としてはありうるものの、聞き取り調査のいわば対話の中で発音された語はそれぞれがテンポが異なるため、発話速度を可能な限り一定に保つべくコントロールする意図も込めてキャリア文を使用した。さらに、既に拙論にて度々指摘してきたことではあるが（例：三村 2021⁽¹⁵⁾: 90-91）、筆者のインフォーマントは職業柄故か、時には囁んで含めるかの如き、どちらかと言えばいささか不自然とも言えるようなゆったりとしたテンポで発音することもあり、従って、なるべく自然な速度で且つ自然な調音の発話となるよう、対話形式のキャリア文を用いた。

具体的に使用した対話文を下記に示す：

(16) a. *Er þetta* [A'] [A'']?

is this adj. noun

「これは〇〇な△△ですか？」

b. *Nei, þetta er* [B'] [B''].

no this is adj. noun

「いいえ、これは〇〇な△△です。」

上記のキャリア文の空欄箇所 A' と B' に(17)に示す目標語 (target words) である二重母音を含む形容詞を、また A'' と B'' の空欄には名詞それぞれを挿入して対話文を完成させ、読み上げてもらった：

(17) A', B' = *bleikur* [bléikʉ] 「ピンクの (男性形)」・*bleik* [bléik] (女性形)・*bleikt* [bléikt] (中性形)

grár [gráʉ] 「灰色の (男性形)」・*grá* [gráʉ] (女性形)・*grátt* [gráʉ^h(t̃)t] (中性形)

rauður [róeyðʉ] 「赤い (男性形)」・*rauð* [róeyð] (女性形)・*rautt* [róey^h(t̃)t] (中性形)

A'', B'' = *jakki* [já^hkʉki] 「ジャケット (男性名詞)」

málning [máʉlniŋg] 「ペンキ (女性名詞)」

blek [blé:k] 「インク (中性名詞)」

なお、筆者の調査計画・準備のまずさから、調査対象となる二重母音が（正書法で表すと）*ei* と *á* と *au* の三つのみとなってしまった。なるべく自然な対話文となることを優先したがために目標語に *ó* を含むものを選定できなかった。また、*æ* に関しては *grænn* 「緑の (男性形)」・*græn* (女性形)・*grænt* (中性形) を目標語として読み上げ文の資料を採取したものの、後述する音環境の統一を図ることができず、結果として今回の分析には使用することができなかった (*græn* は末尾子音が一つ、*grænn* と *grænt* は末尾子音が二つである点に留意されたい；今回の調査では子音の後続しない開音節構造に現れる *æ* が採取できなかった；なお第 5.2 節も参照のこと)。

また、参考資料として、二重母音を含む目標語の他に、下記に示す長母音を含む語も当てはめて読み上げ調査を行った：

(18) a. *gulur* [gú:lʉ] 「黄色い (男性形)」・*gul* [gú:] (女性形)・*gult* [gúlt] (中性形)

b. *hvítur* [kvi:tʉ] 「白い (男性形)」・*hvít* [kvi:t] (女性形)・*hvítt* [kvi^h(t̃)t] (中性形)

目標語を当てはめて完成させた対話文の提示にはノートパソコン (Apple 社 MacBook13 インチ) を使用した。プレゼンテーションソフト (Apple 社 Keynote) にて対話文を記したスライドを作成し、各スライドを 5 秒で切り替わるように設定して表示した。対話文の読み上げは合計で 4 回実施した。最初の一回は練習として位置付けて、後述する分析には残りの 3 回分の録音を使用した。なお、これまでの拙論の調査と同様に、今回もインフォーマントの了承を得た上で調査の一部始終を録音機器ならびに調査ノートを通じて記録した (録音機器: Marantz 社 PMD661MKII; マイクロフォン: audio-technica AT899; サンプリング周波数: 96kHz)。

4.2 分析と結果

前節の(17)では、単純に(名詞の性に一致・照応させた)語形の点から目標語を示したが、後述する分析と考察を踏まえると、音環境の点から配列し直したほうが分かりやすい。分析対象である二重母音の現れる環境を音節末尾子音の有無と数の点から配列すると下記の通り(‘\$’とピリオドは音節境界を、‘#’は語境界を表す)：

(19) 音節構造	[ɛ̃]	[ã]	[œ̃]
(C) __ Ø{\$, #}	<i>blei.kur</i> [blé̃.kʰʉ̃]	<i>grá</i> [grá̃]	<i>rau.ður</i> [ró̃ɣ̃.ðʰʉ̃]
(C) __ C	<i>bleik</i> [blé̃k]	<i>grár</i> [grá̃ʉ̃]	<i>rauð</i> [ró̃ɣ̃ð]
(C) __ CC	<i>bleikt</i> [blé̃kʰt]	<i>grátt</i> [grá̃ʰ(tʰ)t]	<i>rautt</i> [ró̃ɣ̃ʰ(tʰ)t]

表の一段目の音節構造に着目されたい。純粋に音環境にのみ着目すれば、*blei.kur* の *blei-*と *grá* のいずれも開音節構造として同列に扱うことができるが、前者のように多音節語の中の一音節である場合と後者のようにそれ自体が一音節語をなす場合とを厳密に分けるべく、\$と#の記号を付した。

分析作業は下記の要領で行った。まず、読み上げ調査を通じて採取した音声を *Praat* (version 6.3.03; Boersma・Weenick 2022⁽²⁸⁾) を使用して音声波形とスペクトログラムの形で可視化した。その後、音声波形とスペクトログラム目視による観察、並びに聴覚による音声自体の主観音声学的観察に基づいて分析対象である二重母音の箇所を特定(セグメンテーション)した。最後に、当該箇所の持続時間(単位は秒)を抽出ののち、3回分の平均値を算出した。分析結果は下記の通り：

(20) 音節構造	[ɛ̃]	[ã]	[œ̃]
(C) __ Ø{\$, #}	0.127455	0.179364	0.147472
(C) __ C	0.147775	0.190158	0.189203
(C) __ CC	0.082683	0.158499	0.126852

4.3 考察

続いて分析の結果とその考察に移る。まず特筆すべきは、(20)に示した数値から読み取れる通り、先行研究が指摘するような「長さ」の差異が二重母音に存在することが筆者の資料の分析からも明らかとなった。また、こちらも従来の論究における主張と同様、二重母音の「長さ」の差異と音節末尾子音の数との間には相関があり、末尾子音が二つある場合(例: *bleikt*)の方が「長さ」が短いことも明らかとなった。ここでさらに特筆すべき重要な点は、末尾子音がゼロの場合(例: *blei.kur*)と一つの場合(例: *bleik*)との間にも「長さ」の差異が確認されたことである。従来の論究では、例えば Magnús Pétursson (1978⁽²⁷⁾: 46) の下記の記述からも推察される通り、二重母音の「長さ」を長短のみの二段階で捉えていた: “Sérhljóð í áhersluatkvæði eru löng í nútímalslensku . . . e[E]f ekkert samhljóð fer á eftir e[E]f eitt samhljóð fer á eftir” 「現代アイスランド語において強勢を伴う音節の母音【筆者補足: 二重母音も含む】は、【中略】もし全く子音が後続しない場合【中略】、一つ子音が後続する場合は、長い」。しかしながら、筆者の調査・分析の結果から自明な通り、二重母音の「長さ」の差異は三段階(あるいはそれ以上)の区別がなされうるものであり、単純に長短の枠組みで捉えられるものではないことが明らかとなった。筆者の調査・分析の結果から、少なくとも今回の調査の範囲では、音環境の点から二重母音の「長さ」の差異に関して次のような関係を確認することができる(次頁の図も参照されたい)：

$$(21) (C) _ C > (C) _ \emptyset\{\$, \#\} > (C) _ CC$$

さて、従来の論究に反して二重母音の「長さ」に多段階の差異を認めうる事が明らかとなったが、これは二重母音の「長さ」が音環境に依存する現象であり、言うなれば音声学的な持続時間(duration)の問題であって音韻論の枠組みで論ずるべき音量(quantity)の問題ではない、ということをも同時に明らかとなる。筆者の調査・分析では音環境を三種類に分類したがために持続時間に三段階の差異が確認されたが、より細かく音環境を規定すればそれに応じて持続時間の差異は確認されるのである。

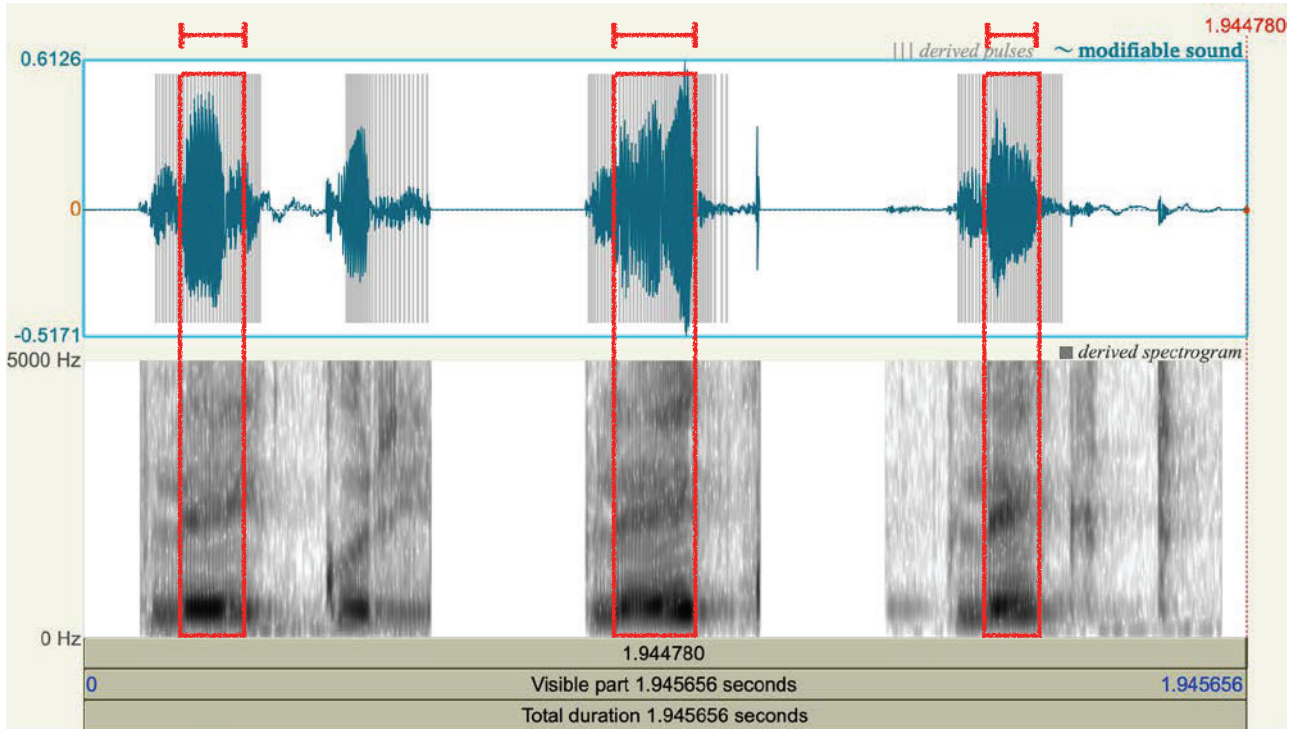


図: *bleikur*・*bleik*・*bleikt*における二重母音の持続時間の比較

では、このような二重母音の持続時間の差異が音環境から完全に説明することが可能であるか、検討が必要である。というのも、もし（アクセントや音節境界、形態素境界等の情報をも含めた広義の）音環境に基づいて持続時間の生起条件を音声学的に過不足なく説明することが可能であれば、二重母音の持続時間の差異は（語彙レベルでの指定が必要であるという意味での）音韻論的な議論の対象外となるが、もし不可能であるならば、持続時間の差異を何らかの形で音韻論の枠組みで扱う余地が残るからである*10。

まずは(C)_C と(C)_CC の場合での持続時間の際について考察する。いずれも音節末尾子音(coda)の位置が空所ではないという点では共通した構造ではあるが、なぜ(C)_C における二重母音の方が(C)_CC におけるそれよりも持続時間が長いのであろうか。これはアイスランド語がストレスアクセント言語であることと深く関わっていると考えられる。ストレスアクセントの言語では、リズムの山である強拍が、間に弱拍が存在するか否かあるいはその数に拘らず、ほぼ等間隔に繰り返すリズムを持つ。文や句であれば、それらを構成する語の主強勢を担う音節が、リズムを形成する上で強拍として実現する。ここで考察する(C)_C という音節も(C)_CC という音節も、いずれもがそれ自体で一音節語（例: *bleik*, *bleikt*）として機能するが、先に述べた強拍と強拍の間の等時性を踏まえると、それ自体で強拍として機能する(C)_C と(C)_CC はほぼ同一の持続時間を持つことが仮定される。この仮定に立てば、音節全体としてほぼ同一の持続時間を保つためには、末尾子音の数が多いほど母音自体の持続時間は短くならざるを得ないことが容易に予想される。以上から、(C)_C における二重母音の方が(C)_CC におけるそれよりも持続時間が短いと解釈することが可能となる。

同様に、ストレスアクセント言語におけるリズム上の制約、つまりは強拍を担う音節の持続時間をほぼ一定に保とうとする制約に基づいて、(C)_Ø{#,}と(C)_CC における二重母音の持続時間の差異は説明することが可能である。音節自体の持続時間をほぼ同一に保とうとすれば、当然のことながら、末尾子音の位置が埋まっている(C)_CC の方が末尾子音の長さの分だけ二重母音を短く発音しなくてはならないからである。

*10 音節末尾子音の有無やその数と母音の長さ（持続時間）との間に関連があるという事実自体は、既に多く研究者により多くの言語に関してなされてきた（例: Abercrombie (1967⁽²⁹⁾): 81)は英語の *bee*, *beat*, *beast* の間の差異について言及）。しかし、その関連性の背後にあるメカニズムを説明した研究はそれほど多くはない。

では、(C)_Ø{#,#}と(C)_C との間における二重母音の持続時間の差異はどのように説明することができるであろうか。(20)に示した数値から明らかな通り、(C)_Ø{#,#}における二重母音の方が(C)_C におけるそれよりも持続時間が短い (*blei.kur* の *blei-*では 0.127455 秒であるのに対して *bleik* では 0.147775 秒)。実はこの分析結果は、母音の持続時間と音節末尾子音の有無や数との間に観察される一般的な傾向性に反している。注 10 に引いた Abercrombie (1967⁽²⁹⁾: 81) も言及している通り、末尾子音を欠く開音節構造 (例: *bee*) における母音の方が末尾子音が一つの場合 (例: *beat*) のそれよりも長いのが一般的な理解である。さらにストレスアクセント言語におけるリズム上の制約の観点から見ても、(C)_C における二重母音の方が末尾子音一つ分持続時間が短くならざるを得ないことは容易に想像できる。

ここで注意すべきは、(C)_Ø{#,#}は多音節語を構成する一音節をなす場合 (例: *blei.kur* における *blei-*) があるのに対し、(C)_C はそれ自体が一音節語を形成している (例: *bleik*) という差異である。この差異を踏まえると、(C)_Ø{#,#}と(C)_C との間における二重母音の持続時間の差異もリズム上の制約に基づいて説明することが可能である。ストレスアクセント言語では強勢を担う音節を等時的に配置することでリズムが生み出されると既に述べたが、語それ自体もリズムの現れうる発話であることを考慮すれば、弱拍を有する多音節語における強勢音節の方がそれ自体で一音節語を成す強勢音節よりも持続時間が短く実現することが予想される。そのため、開音節構造であるにも拘らず(C)_Ø{#,#}における二重母音の方が(C)_C におけるそれよりも持続時間が短くなったと解釈することができる。以上の解釈は、二音節語を構成する音節である *blei.kur* の *blei-*並びに *rau.ður* の *rauð-*に比して、それ自体で一音節語を形成する *grá* の方が持続時間が長いという事実からも裏付けられる^{*11} ((20)の表を参照されたい)。

以上、本節での考察から、二重母音に観察される持続時間の差異は音環境から過不足なく説明することが可能であり、従って二重母音は音韻論的には量的な対立を認める必要はないという結論を導くことが可能である。

4.4 二重母音の音素分析

前節での考察を通じて、二重母音はに量的な対立を音韻論的に認める必要はないことが明らかとなった。では、音素として二重母音をどう捉えるべきであろうか。先行研究における二重母音の音素分析・音韻解釈に関しては、既に第 3.3 節にて批判的な視点から考察した。ここで再度強調しておくが、先行研究における議論の展開や論法に不備が残る点が問題なのであって、二重母音自体を自律した音素として解釈することは理論的には十分にありうる解釈であると筆者は考える。重要な点は、音素分析や音韻解釈には唯一絶対的なものは存在しない、ということである。先行研究が想定する音韻論の中において、二重母音を自律した音素として解釈する案が、アイスランド語における他の様々な音声・音韻現象を説明する上で整合性を保ち、且つそれ自体で十分な説明力を持っていればそれでよいのである。従って、この意味において、本節において筆者が展開する解釈案が、たちどころに先行研究の解釈案を否定することにはならない点には留意が必要である。

さて、前置きが長くなってしまったが、筆者はアイスランド語の二重母音を母音音素/a, e, i/と子音音素/v, j/の結合であると解釈する。具体的に述べると、[æɪ, eɪ, œɣ, au, øu]をそれぞれ/aj, ej, øj, av, ov/と解釈する。次の二点が大まかな論拠である:i) 音韻解釈上の「経済性 economy」を優先する; ii) 聞き取り調査における主観音声学的観察を通じて得られた音声事実の反映と、それを踏まえた体系的な解釈を重視する。以下にそれぞれの論拠を詳しく見ていくことにする。

まず最初に、音韻解釈上の「経済性」についてであるが、筆者は音素目録は可能な限りそれを構成す

*11 本文で考察した通り、多音節語であるか一音節語であるかという視点に基づけば *blei-*や *rauð* と *grá* の間の持続時間の差を説明することは可能であるが、一方で *grá* と *grár* の間における二重母音の持続時間の差は説明できない。というのも、リズム上の制約に基づく筆者の解釈が正しいならば、*grá* における二重母音の方が長い持続時間を示さなくてはならないからである ((20)の表を参照されたい)。詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、おそらく末尾子音の声の有無が関与していると考えられる。本稿で分析対象とした *grár* は音節を閉じる位置に立つ *r* が無声音 (無声化音?) であり、そのため直前の母音の持続時間が短縮されたと考えられることは十分に可能である (有声子音に先行する場合の方が無声子音に先行する場合よりも母音の持続時間は長い傾向にある; Lehiste 1970⁽³⁰⁾: 24-25, Grønnum 2005⁽³¹⁾: 190-191)。

る項目である音素が少ない方が望ましいと考える。仮に音素目録に相当するものが人間の脳に先天的に備わっている（あるいは個別言語に関しては周囲の言語刺激に従って後天的に形成される）とするならば、目録を構成する音素の数が少なければ少ないほど、脳の情報処理機構にとって労力や負担が少ないはずである。この仮定に立てば、先行研究が唱えるように、既存の母音音素と子音音素の目録に加えて別途、二重母音音素を五つ設定する解釈に比べると、既存の音素である母音音素と子音音素/v, j/を組み合わせ（具体音音声のレベルでの）二重母音を導き出す筆者の解釈の方が、脳の情報処理機構にとって負担や労力が軽減されるという意味において経済的で優れていると言えよう。

さらに重要な点として、筆者の解釈案はアイスランド語において実際に観察される音声現象に合致しているという点で優れている。(22)の例を参照されたい:

- (22) *af* [á:v̥]~[a:v̥] 「~の, ~から」
 e.g. *af hverju* [a:v̥ kʰé(:)rjʉ] 「なぜ、どうして」

上記の例は、前置詞 *af* (単独で発話した場合はアクセントを有し、長母音で発音される) が句の一部として取り込まれ、その結果 (リズムの弱拍を担うこととなり)、長母音が短音化した現象であるが、短音化に伴い音節末尾の子音[v̥]が二重母音の後部要素となって[v̥]となっていることを示す。このような (具体音声レベルでの) 長母音の短音化に伴う音節末尾子音を含めた二重母音化の現象は、複合語形成の際にも観察される:

- (23) *rafmagn* [rá:v̥màkn̩]~[rá:v̥makn̩] 「電気」
 e.g. *rafmagnsgítar* [rá:v̥makn̩sgítar̩] 「エレキギター」
 cf. *gítar* [gítar̩] 「ギター」

上記の(23)は電気を意味する *rafmagn* がさらに大きな複合語である *rafmagnsgítar* を形成した例である。ストレスアクセント言語であるアイスランド語ではリズム上の制約から (複合語形成の結果) 語の長さ (音節数) が長く (多く) なればそれに伴って語を構成する個々の音節の持続時間は短くなる傾向にあるが、その結果、(23)の例では *rafmagn* の *raf-* が短音化し、それに伴い二重母音[a:v̥]が形成されている。なお、アイスランド語の有声唇歯摩擦音/v/は、音節の頭の位置においてもその閉鎖の度合いは弱く、また音節を閉じる位置においては調音に費やされるエネルギーの減衰に伴い聴覚的に顕著な摩擦を形成するだけの調音器官の狭窄を保持させることはできず、[v]ないしは無声化した[v̥]として現れるのが一般的である。特に当該音節が欠く場合は狭窄の度合いはさらに弱まり、[v̥]としても現れうる。以上の点を踏まえると、*rafmagn* の *raf-* における[v]も有声唇歯摩擦音/v/と分析することが可能であり、同時に、二重母音[a:v̥]を音素結合/av/と分析することは音声学的に妥当であると結論づけられる。

さて、他の二重母音に関しては、生憎、筆者の資料では類似した母音の短音化に伴う二重母音化の現象は確認されていないため、[a:v̥]と並行的な音素分析が可能か否かはたちどころには結論づけることはできない。しかしながら、個別言語の音韻論において、音素目録を体系として捉えて均衡を維持すべく、母音音素と子音音素が一つのまとまり (シンタグマ *syntagma*) をなして同列 (パラディグマティック *paradigmatic*) に振舞うことは決して珍しいことではない。アイスランド語に置き換えて考えてみれば、有声硬口蓋摩擦音[j]を音素として設定することができれば「母音音素+v/」と完全に並行的な関係を築くことが可能であるが、音素/j/を設定する必然性はない。しかしながら(4)に示した通り、アイスランド語では接近音音素/j/を設定することはできるため、「母音音素+v/」との同列的な関係を保持しつつ、「母音音素+j/」という結合から二重母音[æj, ej, œɣ]を導くことは可能である。なお、[æj]における[æ]と[œɣ]における[ɣ]がいかにして導かれるか疑念を抱く向きもあるかと思うため補足すると、[æ]に関しては/j/の口蓋化により/a/の調音点 (舌の位置) が高く (口腔全体で言えば狭く) なったと解すれば、[æ]を/a/の実現形として説明が可能である。また、[ɣ]に関しては二重母音の主要素である[œ]が円唇母音であるため、/j/に唇の円めが伴ったと考えれば[ɣ]として実現することは容易に説明可能である。

4.5 二重母音の「長さ」の扱いについて

最後に、従来の二重母音の「長さ」の扱いに関して批判的な視点から私見を述べる。アイスランド語

の二重母音における長短の二種類の「長さ」の違いが半ば常識のように唱えられ、音声・音韻研究の分野は言うに及ばず、アイスランド語教育の分野においても殊更に強調ならびに重要視されていることは既に指摘した通りである。しかし、果たしてその必要があるのかに関しては、実際にアイスランド語の音声に触れながら研究調査を進めてきた筆者は予てから疑念を抱いていた。

まずもって、実際のフィールドワークを通じて明らかなことであるが、(具体音声レベルでの)長母音と短母音の差異をインフォーマントが明確に認識しているのに対して、二重母音の長短の差異はそれほど明確には認識しないことは重要である。既に第 3.3 節にて触れた通り、こちらが(具体音声としての)長母音を誤って短母音で発音するとインフォーマントから即座に訂正されてしまうのに対して、先行研究等で「長い」と言われている二重母音を敢えて「短く」発音してもインフォーマントからは特段の指摘はなされない。このような経験を踏まえると、二重母音における「長さ」の差異は、アイスランド語教育や発音指導において殊更に強調する必要はないと結論づけることができよう。

また、前節での考察から既に明らかな通り、従来唱えられてきたアイスランド語における二重母音の「長さ」の差異は、二重母音の現れる音環境に基づいて過不足なく説明することが可能である。このことから、従来、アイスランド語音韻論の研究書等において二重母音の「長短」の差異を長音記号 ([:]) を用いてまで表記し分けてきたことは行き過ぎた記述であると筆者には思われる。さらに、音環境の数だけ二重母音の「長さ」の差異が存在するという事実を踏まえると、「長短」の二段階の枠組みで二重母音の持続時間を捉えることは音声事実をあまりにも歪曲していると言わざるを得ない。

5 結語

5.1 まとめ

以上、本稿ではアイスランド語の二重母音について、特に持続時間の扱いと音素分析に焦点を当てて、筆者自身の私見を述べてきた。本稿の論点をまとめると次の通り:

(24) a. 背景・問題点

- i) アイスランド語には[æɪ, eɪ, œɪ, aʊ, øʊ]の五つの二重母音があり、それぞれに「長短」の変種があると先行研究やアイスランド語教育の分野では常識のように唱えられてきた。
- ii) しかし、その主張を明確に論証した先行研究は皆無であり、また積極的に論証を試みている研究においても、論の展開に不備や疑問点が残る; 特に、二重母音の「長短」の差異を長母音のそれと並行的に扱っていると推察される点は疑問視すべき点である。
- iii) アイスランド音韻論において二重母音を音素としてどのように位置づけるかについて納得のいく論証を展開した研究は少なく、二重母音を自律した音素として設定することを主張すべく詳細な論証を試みる研究においても論証の不備や議論の妥当性に疑問が残る。

b. 筆者の主張

- i) 従来の見解と同様、筆者も二重母音に「長さ」の差異の存在を認めるものの、フィールドワークの経験から、二重母音の「長さ」の差異は長母音と短母音の間の差異と比べて、母語話者は認識していない可能性が高い。
- ii) 二重母音の「長さ」の差異は音環境から導くことができるものであり、従って、音韻論的には二重母音は量的な対立を認めるべきではない。
- iii) 以上の二点から、アイスランドの二重母音における「長短」の差異は、音声・音韻研究の領域やアイスランド語教育の分野において殊更に取り上げる必要のある現象ではない^{*12}。
- iv) 筆者は[æɪ, eɪ, œɪ, aʊ, øʊ]をそれぞれ/aj, ej, øj, av, ov/と解釈する。五つの自律した二重母音音素を新たに設定するよりも、既存の音素の組み合わせにより二重母音を導き出す方がより経済性の高い解釈であるのに加えて、[a:ʊ] > [aʊ]といった長母音の短音化に伴う二重母音の出現という実際の発話に観察される現象とも合致する。

5.2 今後の課題

本小論考では、アイスランドの二重母音の音韻解釈に関して筆者なりの結論を導き出しはしたものの、未だに課題は残されている。まず第一に、本研究では、なるべく自然な読み上げ音声資料を採取することを優先したがために、分析対象となる項目の数が著しく限られていた上に、五つある二重母音のうち [aʊ] と [øʊ] が漏れてしまっていた。資料の補充を要するという点では、本小論考での議論は未だ完全とは言えず、試論の域を脱してはいないと言えよう。今後は、五つの二重母音を満遍なく採取できるよう、目標語の選定は言うに及ばず、自然さの度合いを保ちながら読み上げ文（キャリア文）の作成を行う必要がある^{*13}。

また、筆者の主張の要であるストレスアクセント言語におけるリズム上の制約と音節構造に基づく母音の持続時間の解釈について、その正当性をより強固なものとする必要がある。というのも、本研究では (C)_Ø{ \$, # }、(C)_C、(C)_CC の三つの音環境を考察対象としたが、より細かく音環境を設定した場合にも筆者の主張が成立しうるか否か、検証が求められる。特に、(C)_\$ と (C)_# の差異、換言すれば開音節構造における音節境界と語境界の差異が、母音の持続時間に真に関与しているか否か、個々の事例を増やして検証する必要がある。また、(C)_C や (C)_CC の場合に関しても、末尾子音の情報（声の有無や調音様式など）の点から詳細な検証が求められよう。

謝辞

本小論考は、研究調査を基盤として成り立つものであり、従って研究調査に協力して下さった母語話者の存在なくしては成立し得ないものである。2013年から現在に至るまでインフォーマントとして筆者に尽力して下さっている Auður Guðmundsdóttir 氏にこの場をお借りして心から感謝を申し上げる。また、本稿の査読に携わった二名の匿名審査員の方々からは貴重なコメントや助言を頂いた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。なお、本稿で言及した研究調査は、全て JSPS 科研費の助成を受けて実施したものである（課題番号: 15K16729, 20K00594）。

文献

注記: 執筆者がアイスランド人の場合は（非アイスランド人との共著の場合を除き）、慣例に倣い執筆者名を「ファーストネーム・（ミドルネーム・）ラストネーム」の順に記す。

- (1) Garnes, Sara, Phonetic evidence supporting a phonological analysis, *Journal of Phonetics*, 1, 1973, p273-283.
- (2) Haugen, Einar, On the consonant pattern of Modern Icelandic, *Acta Linguistica: Revue internationale du linguistique structurale*, 2, 1940-41, p98-107.
- (3) Höskuldur Thráinsson, On the phonology of Icelandic preaspiration, *Nordic Journal of Linguistics* 1, 1978, p3-54.
- (4) Kristján Árnason, Hljóð. Handbók um hljóðfræði og hljóðkerfisfræði: Íslensk tunga I, Reykjavík: Amenna bókafélagið, 2005.
- (5) Malone, Kemp, The Phonemes of Modern Icelandic, *Studies in Honor of Albert Morey Sturtevant*, Lawrence: University of Kansas Press, 1952, p5-21.
- (6) Magnús Pétursson, Les articulations de l'islandais à la lumière de la radiocinématographie, Paris: Librairie C. Klincksiek, 1974.
- (7) Magnús Pétursson, Drög að almenri og íslenskri hljóðfræði, Reykjavík: Iðunn, 1976.
- (8) Kristján Árnason, Íslensk málfræði: Seinni Hluti, Reykjavík: Iðunn, 1983.
- (9) Indriði Gíslason・Höskuldur Þráinsson, Handbók um íslenskan framburð, Reykjavík(?): Rannsóknarstofnun Kennaraháskóla Íslands, 1993.

*12 査読者の一名より、日本語東京方言のアクセントにおける「句頭の上げ」（査読者は Initial Lowering という用語を使用）を引き合いに出し、「殊更に取り上げる必要はない」という筆者の表現が強すぎるとの指摘があった。筆者自身は、アイスランド語の発音教育（の特に初歩の段階）においてすら、二重母音の長短の差異は等閑視しても構わない立場であるため、自らの表現が取り立てて強い口調であるとは感じていない。

*13 査読者よりキャリア文を使用しない調査も並行して必要であるとの指摘をいただいた。今後の調査を計画する上で参考としたい。

- (10) Kristján Árnason, *The Phonology of Icelandic and Faroese*, Oxford: Oxford University Press, 2011.
- (11) Alli Páll Kristinsson, *The Pronunciation of Modern Icelandic: a brief course for foreign students*, Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands, 1988.
- (12) 入江浩司, *ニューエクスプレス アイスランド語*, 東京: 白水社, 2017.
- (13) Stefán Einarsson, *Icelandic: Grammar, Texts, Glossary*, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1945.
- (14) 三村竜之, *アイスランド語ストレスアクセントの史的研究: 文献資料とフィールドワークに基づく試論*, 北海道言語文化研究 19, 2021, p11-94.
- (15) 三村竜之, *アイスランド語のアクセント史の構築に向けて*, 日本音韻論学会音韻論フォーラム 2020 (2020年8月29日, Zoom オンライン開催), 2020.
- (16) 窪菌晴夫, *音節とモーラの機能*, 窪菌晴夫・本間猛編, *音節とモーラ*, 東京: 研究社, 2002, p1-96.
- (17) 三村竜之, *ストレスアクセント記述研究管見: フィールドワーカーの視点から*, 室蘭工業大学紀要 72 号, 2023, p18-35.
- (18) Eskeland, Ivar・Magnús Stefánsson, *Lærebok i islandsk*, Oslo: J. W. Cappelens Forlag, 1963.
- (19) Fries, Ingegerd, *Lärobok i nutida isländska*, Stockholm: Biblioteksförlaget, 1976.
- (20) Kress, Bruno, *Laut-und Formenlehre des Isländischen*, Halle: VEB Max Niemeyer Verlag, 1963.
- (21) Ásdís Arnalds・Sólveig Einarsdóttir, *Tungutak: Hljóðfræði og hljóðkerfisfræði handa framhaldsskólum*, Reykjavík: JPV Útgáfa, 2010.
- (22) Hildur Jónsdóttir, *Teach Yourself Complete Icelandic*, London: Hodder Education, 2004.
- (23) Helga Hilmisdóttir・Jacek Kozłowski, *Beginner's Icelandic*, New York: Hippocrene Books, 2009.
- (24) Neijmann, Daisy L., *Colloquial Icelandic: The complete course for beginners*, London and New York: Routledge, 2001.
- (25) Sveinbjörn Sveinbjörnsson, *Icelandic phonetics*, Aarhus/København: Universitetsforlaget i Aarhus/C. A. Reitzels Forlag, 1933.
- (26) Kristján Árnason, *Vowel shortness in Icelandic*, Eds. Wolfgang Kehrein and Richard Wiese, *Phonology and morphology in the Germanic languages*, Tübingen: Max Niemeyer, 1998.
- (27) Magnús Pétursson, *Drög að hljóðkerfisfræði*, Reykjavík: Íðunn, 1978.
- (28) Boersma, Paul・David Weenick, *Praat: doing phonetics by computer*, Version 6.3.03, www.praat.org., 2022.
- (29) Abercrombie, David, *Elements of General Phonetics*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1967.
- (30) Lehiste, Ilse, *Suprasegmentals*, Cambridge MA: The MIT Press, 1970.
- (31) Grønnum, Nina, *Fonetik og fonologi: almen og dansk*, Tredje udgave, København: Akademisk Forlag, 2005.